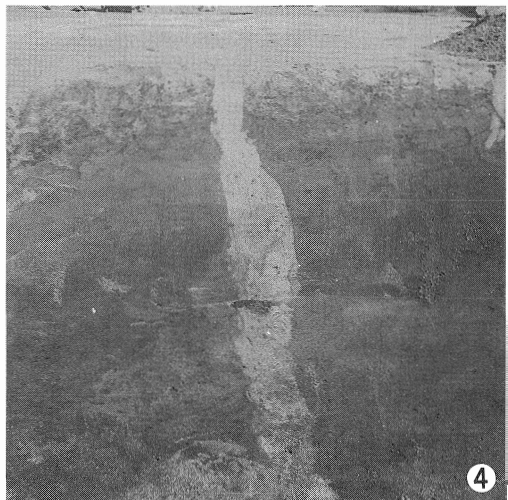
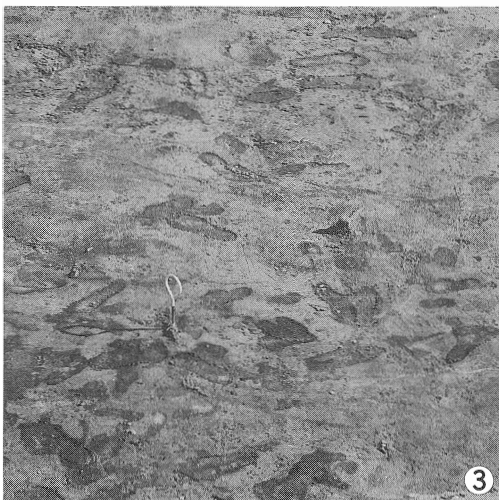
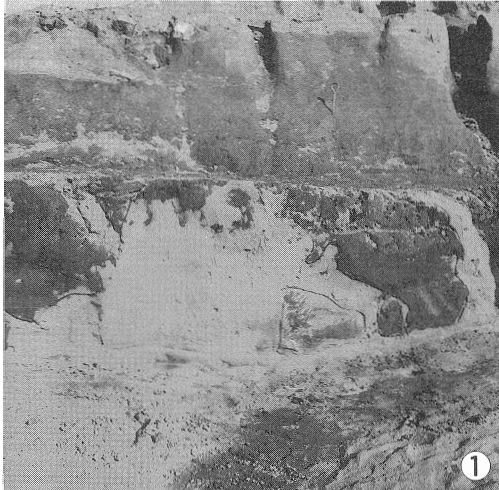


埋蔵文化財 愛知

No. 24



清洲城下町遺跡と地震

清洲城下町遺跡90D区において、地震による地盤の液状化とそれに伴う噴砂が確認されている。

- ①天正地震は1586年1月18日に伊勢湾を中心に発生した。写真はその噴砂の断面。
②天正地震によって170 mを超える砂が噴き上げた。地震の被害の凄まじさを物語っている。
③噴砂を除くと不規則に並ぶ足跡が浮かび上がった。地震時に右往左往する人々のものか。
④天正地震の際の堆積物を濃尾地震の噴砂が貫いている。新旧2回の地震痕が読み取れる。

シリーズ「縄文遺跡」を語る

縄文時代の環境を探る

縄文の海

西尾市中畑町の矢作川のほとりに「清水遺跡」と呼ばれる古墳時代から中・近世の貝塚を中心とした遺跡がある。ここでは、1989年度の発掘調査によって比高4mの海岸段丘直下の低湿地から、薄手で文様のはっきりしない土器片が多数発見された。

遺跡周辺の段丘堆積物を構成する地層は西に向かってゆるやかに傾いていて、そのため地層中を流れてきた地下水は、かつてこのあたりの崖から湧き出していたらしい。清水遺跡の名は、このことに由来するともいわれる。

きよらかな清水の湧いた土地も、水道水が普及し、周りの土地が埋め立てられるにつれて、いつの日か水はけの悪い沼地になり、やがてかえりみられなくなった。それどころか、そこは台地の上に移り住んだ人々が長期間にわたって、さまざまな生活ゴミを放り投げた「ゴミ捨て場」にもなっていたのである。

この場所を通して段丘上にのびる道路が建設されることになり、ときに悪臭を発するヘドロ状の沼沢地にも発掘の重機が入った。まさかそこから縄文時代の土器片が発見されようとは、予想もしなかったことである。

詳しく調べてみると、清水遺跡から見つかった縄文土器には2種類あることがわかった。一つは南知多町の清水ノ上遺跡を標識とする「清

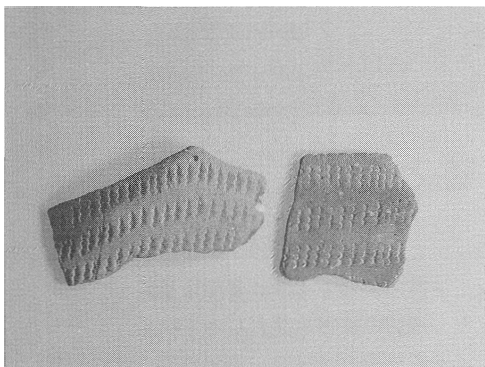
水ノ上Ⅱ式土器」(一部にⅠ式をまじえる)、もう一つは同じく南知多町の塩屋遺跡を標識とする「塩屋式土器」であるとされる。前者は破片数にして約1000点、後者はわずかに5～6点であった。現在の見解によれば、前者は今から約6000年前頃の縄文後代前期、後者は今から約7000年前頃の縄文時代早期の土器といわれている。

この頃、気候は大変暖かく、海岸線は平野の奥深くまで進入して日本各地に波静かな内湾性の海をもたらした。一般に「縄文海進」といわれる海水面の上昇は、この時期の海のことを呼んでいる。その当時、清水遺跡の位置する台地の縁は、波の打ち寄せる渡食崖となっていた。

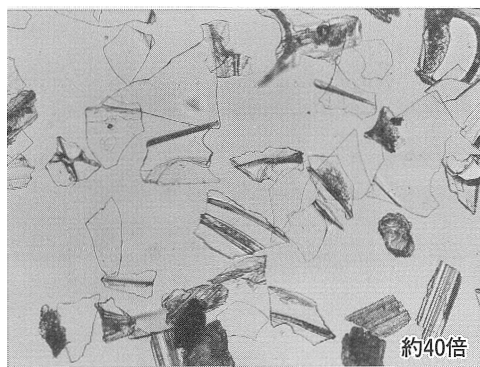
アカホヤ火山灰

今から約6300年前の縄文時代早期の末、九州の南に位置する鬼界カルデラが大噴火し、東海地方にも10cmに達する火山灰が降りそそいだ。火山ガラスは扁平形・透明できわめてシャープなものと、ビール瓶のような褐色で扁平ないし不定形のものの2タイプからなっている。1989年度に実施した朝日・岡島両遺跡基盤層のボーリング試料中には、この火山灰降灰の記録がはっきりと残されている。「アカホヤ火山灰」である。

九州・四国地方は20cmを越える火山灰層が降りつもることによって、破局的ともいえる環境



清水遺跡から出土した縄文時代前期の土器片



今から約6300年前のアカホヤ火山灰(朝日遺跡産)

破壊をこうむった。アカホヤ火山灰降灰の影響が、はたしてどこまで及んだのか未だ議論が分れるところであるが、濃尾平野や三河湾岸ではこの火山灰の降灰層準あたりから縄文時代中期にかけて、海が急速に退いていき、かわって内陸から多量の砂が吐き出されて内湾を埋めていったことがボーリング試料から読みとることができる。

アカホヤ火山灰降灰ののち、清水遺跡付近の段丘上では塩屋式土器を使用した縄文早期の人影はすでになく、清水ノ上Ⅰ・Ⅱ式土器に代表される貝殻文様の土器を多用する縄文前期の人々が村を築いていた。段丘下位の平坦面は西に向かって深くなる波食台を形づくっていて、波に洗われたことを物語る粗粒砂層の下に、植物片混じりの海成シルトが薄く堆積していた。シルト層中の植物片の放射性炭素年代を測定したところ、 $6310 \pm 120 \text{ y. B. P.}$ をはじめ3点の年代値が得られたことより、厚さ2mのヘドロの下に何と今から6000年前の縄文海進の記録をとどめるタイムカプセルが、そっくり埋もれていたことが明らかになったのである。

縄文中期の埋積浅谷

つづいて話は春日井市松河戸町の松河戸遺跡。ここでは環状2号線建設に伴う発掘調査が1987年度より4年間にわたって実施された。松河戸遺跡からも清水遺跡同様、縄文前期の土器に混じって縄文早期の土器が出土し、濃尾平野東北部における縄文人の活動の様子が次第に明らかになってきた。

こうした考古学的な成果と並んで、松河戸遺跡では縄文時代の頃の古環境を探るうえで重要な発見があいついだ。その一つは、庄内川水系の化石谷ともいえる「埋積浅谷」が発見されたこと。そして、その下底付近の泥炭層の放射性年代値が数多く求められ、この谷の形成が今から4000～4500年前に遡る縄文時代中期の侵食地形であることがわかってきた。さらにこの泥炭層中より、現在は北海道や東北地方に棲む寒冷型の昆虫化石（アシボソネクイハムシ）が多数発見されるに及んで、下刻の時期が「縄文中期の寒冷化」に対応したものであることが知られ

るようになった。

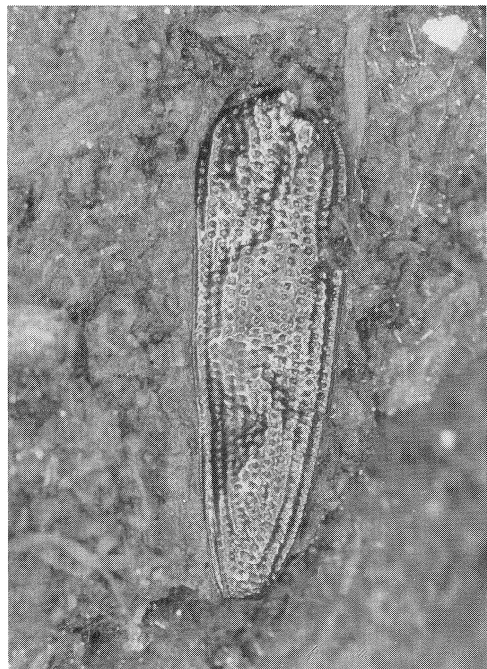
堆積物の黒泥化と弥生の小海退

つづく縄文時代後期の終わり頃、松河戸遺跡では広範囲にわたって火山灰（松河戸火山灰）が降りつもった。厚さは最大2cmにも満たないものであったが、水域環境に多大な影響を及ぼしたことが推定される。それは今から約3000年前の縄文時代後期と晩期の境界付近のできごとであった。

そして、縄文時代晩期の頃には、気候が不順になった時期が存在したことが古くより知られている。一般に「弥生の小海退」と呼ばれる気候の冷涼化は、縄文晩期～弥生前期にかけてのできごとであろうと考えられている。この時期、堆積物が黒泥化し湿地帯における地下水位低下とともに、河川の活動が盛んになって再び下刻が進んだことが、松河戸遺跡や朝日遺跡の発掘調査によってわかってきた。

河道の活発化と地下水位低下は、平野の前進・拡大を促し、来るべき弥生時代の人々に新しい活躍の舞台を提供することになったのである。

（森 勇一）



縄文時代中期のアシボソネクイハムシの化石
（朝日遺跡産）長さ約6mm

遺跡紹介

吉田城跡

豊橋市

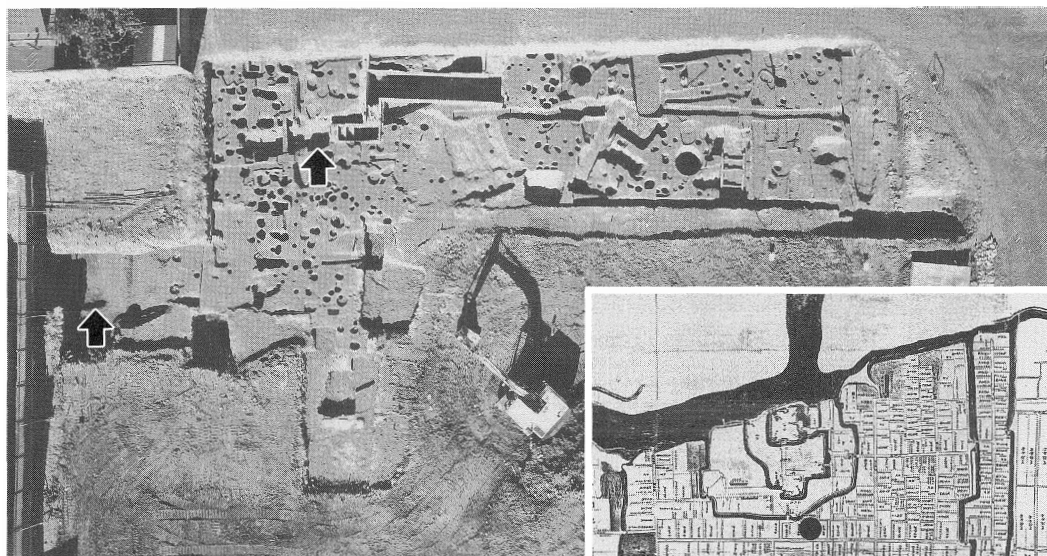
吉田城跡は豊橋市八町通に所在し、豊川左岸朝倉川との合流点付近の豊橋段丘上に位置する。今回の発掘調査は豊橋警察署の建替えに伴うもので、調査面積は600㎡である。吉田城の位置する豊川下流域の豊橋段丘は古代以来街道筋にあたり、古代においては飽海渡（しかすがの渡し）、中世では渡津宿（鎌倉街道）、そして近世には東海道吉田宿として東三河の交通の拠点とされてきた。吉田城（今橋城）は永正二（1505）年豊川市北部に勢力を伸長していた牧野古白により創建され、徳川家康の家臣であった酒井忠次の整備拡張の結果、東三河と遠江境の戦略的拠点となる。この吉田城を近世的城郭に変貌させたのは、天正十八（1590）年に岐阜より入封した池田輝政であった。池田輝政は在城十年間で城域や武家屋敷地の整備につとめ、84万㎡におよぶ広大な城地を持つまでにいたらしめる。しかし、建設途中で関が原合戦の勲功により姫路転封となり、以後吉田藩は幕藩期を通じて6～8万石の大名領となり、城郭自体の完成は見られないまま明治を迎える。

調査区は武家屋敷地区の一角で、幕末期に作成された「吉田藩士屋敷図」によれば家老西村氏の屋敷地にあたる。明治以降警察署用地として活用されていた為、それに伴う建替えや戦時中の防空壕等による攪乱が激しく、遺構の残存状況は決して良好とは言えなかった。但し、遺構の掘方が深い為攪乱の下層から遺構の底部を検出することができた。

今回の調査において注目すべき遺構として、調査区西半部で検出した2条の溝（写真矢印）をあげることができる。1条は後世の遺構により溝の肩は削平されているが、調査区内で幅2m、深さは現地表面から2mを計り、調査区内で収束または西へ屈曲する。他の1条は幅1.5m、深さ0.7mを計り、調査区西端で立ち上がり、東から北へ円弧を描くように屈曲している。2条の溝とも時代は16世紀と考えられることから、池田輝政入封以前の遺構であり、従来研究史において現存の吉田城内に存在したと考えられていた中世吉田城（今橋城）の構造を考える上で貴重な資料となるとと思われる。

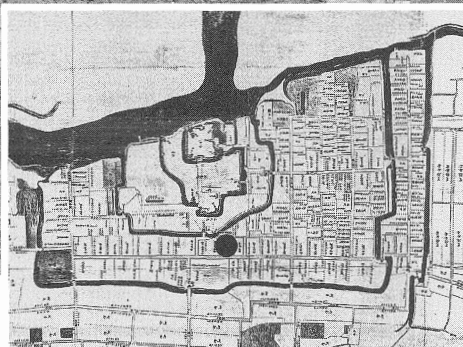
この他に古墳時代の竪穴住居2軒、江戸時代の井戸2基、溝数条、柱穴と思われる土坑多数を検出した。

(川井啓介)



上：調査区全景（矢印は戦国期の溝）

下：「吉田藩士屋敷図」（●印調査区）



黄金堤

吉良町

黄金堤は、愛知県幡豆郡吉良町大字岡山字下り松に所在する、吉良上野介義央の築堤といわれる水防堤である。

調査は、県道西尾吉良線の改築工事により、堤の一部が削平されることが判明したため、平成2年10月15日～11月6日にかけて、100 m²を発掘した。

遺跡の立地を眺めると、吉良町の北部には50m級の低丘陵が東西に伸び、矢作古川に至っている。この丘陵を南北に貫く県道西尾吉良線が、丘陵以北の西尾市と境をなす所に黄金堤は位置している。堤以北の地は、須美川・安藤川・広田川・矢作古川の諸川が収束する形で流れ、近代に至ってもしばしば洪水に見まわれた地域である。したがって、黄金堤は洪水の難から吉良の地を救う役割を果たす位置に立地する。

この黄金堤は、貞享3年(1686)、吉良の約半分を知行する吉良上野介義央が、領国を洪水から守るために、東の寄名山と西の背撫山の間に築かせた長さ180m、高さ4mの堤である。以後吉良の地は濁流に見まわれることもなく、人々はこの堤を「黄金堤」あるいは、西尾城主・土井利意との約束から一昼夜で築いたことにより「一夜堤」と呼ぶようになったという。

発掘調査は、堤の構造を明らかにすることを

主たる目的として、堤の断面の様子を観察し実測することにした。調査区は、便宜的に県道の東部分をA区、西側をB区とした。

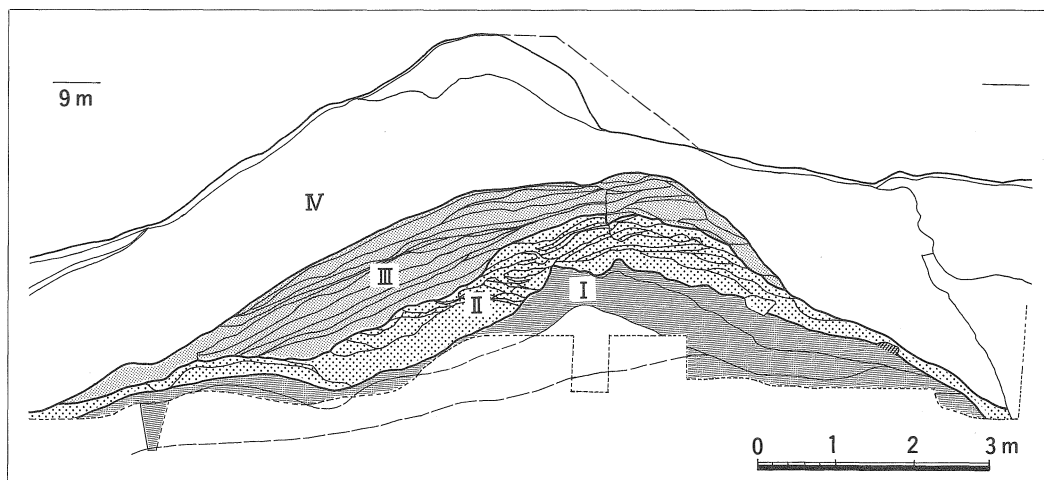
A区では、土取りによって東に後退した背撫山の北麓から県道に伸びる堤状地形(幅7m・高2.25m)と、県道沿いに残存する土盛(幅4m高1m前後)の解明を目的にした。

調査の結果、堤状地形は表土直下で岩盤が露出し、人的構築物でないことが判明した。県道沿いの土盛は、規則性がなく、県道改築(昭和28年)の際の残土と思われる。

B区では、堤を断ち割り、縦断面(4m)と横断面(14m)の土層観察・実測を行なった。

調査の結果、土層は大別して4層に区分できた。第Ⅰ層は、砂質・粘質混じりのオリーブ色土である。第Ⅱ層は厚さ10～20cmの褐色砂礫・粘質土が叩きしめられて、70cmの水平な層をなしている。第Ⅲ層は、第Ⅱ層同様の土が1m程度の厚さで裏のり部分を中心に、のり面と並行して堆積していた。第Ⅳ層は、褐色粘質土が2m程度の厚さで堆積し寛永通宝6枚が出土した。第Ⅳ層は、堆積土の状態や規模(高さ)などの点から考えて、比較的新しい時期に土盛りされたと思われる。従って、一度の築堤に終らず1～2回の拡築が行なわれたと考えられる。吉良上野介の築堤がどの層であったか、出土遺物も少なく解明できなかった。今後の課題としたい。

(大橋正明)



黄金堤断面図

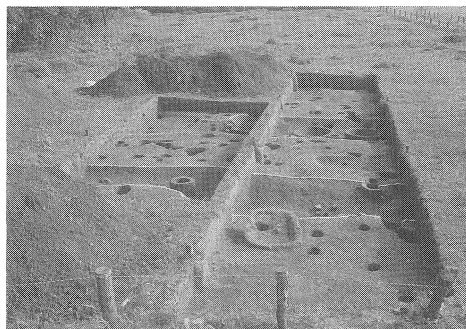
市町村により

三河国分尼寺跡

豊川市

豊川市八幡町忍地に所在する三河国分尼寺跡は、三河国分寺跡とともに大正11年に指定を受けた国史跡である。昭和42年に石田茂作氏らにより発掘調査が行なわれ伽藍中枢部の概要が明らかになったが、寺域が未確認のため、今回国庫補助事業として確認調査を実施した。

調査は、平成2年11月から12月にかけて計7箇所にトレンチを設け行なった。その結果、寺域を区画した施設に伴うと推定される南北溝が指定地東側から1条、指定地西側から2条検出され、これらの溝の位置から寺域の東西規模はほぼ150mと推定されるに至った。西側の2条の溝の間には幅約3mの空間があり、築地塀等が存在したと推定される。また、指定地北縁に設けたトレンチからは直接古代に遡る寺域北辺の遺構は検出されなかったが、その西側に残る土塁や地境などから、寺域の南北規模もやはり



150m 前後である可能性が高い。

過去の調査結果とあわせ、三河国分尼寺の寺域は、僧寺の方600尺に対して現段階では方500尺の規模と推定される。伽藍中軸線は、その中央に設定されており、ほぼ磁北に近い主軸をとる。なお東辺の溝内からは、8世紀末から9世紀にかけての須恵器が出土し、こうした溝が平安時代中頃までに埋没したことが確認された。その須恵器の中には「東」等の墨書が記されるものが数点あり、その存在が注目される。

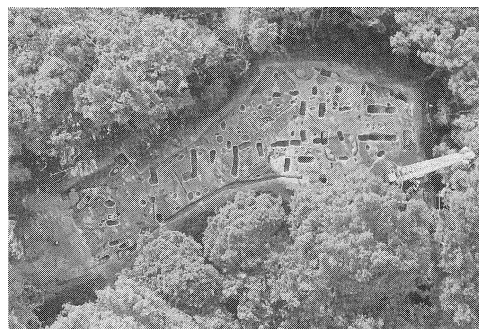
(前田清彦)

真弓山城跡

足助町

真弓山は、足助町の市街地の東端にあり、標高301mである。真弓山城は、戦国時代に足助地方を領有した鈴木氏の居城で、鈴木氏は、天正18(1590)年に徳川家康に従って関東に移っており、その直後に廃城となったと考えられている。遺構は堀切が埋もれているものの、本丸を中心に西に西の丸、西の丸腰曲輪1・2、南に物見台、南の丸、北東に物見台、北腰曲輪1・2(何れも仮称)と良好な状況で残されている。発掘調査は、愛知のふるさとづくり事業「足助城再建事業」に伴うもので、平成2年度から3年度にかけて実施する予定である。

今年度は、本丸、南物見台、南の丸の一部、北腰曲輪1の半分を調査した。本丸は約400㎡と狭いが、それを最大限に使用して(一部は盛土をした可能性もある)、建物を建てている。建物の柱は掘立で、規模等については今後の検討を要するが、3回程度の建て替えが確認でき



た。本丸と南物見台の間には堀切があり、堀には橋がかかっていた痕跡がある。南の丸では、柱穴群とともに、焼土や木炭の散乱、内耳鍋や羽釜等の煮沸用具の出土、南の丸の下に2ヵ所の井戸があることを考えると、日常生活の場所と想定しても良いと思われる。従来、山城はいくさの時の場所で、生活の場所は別の場所(例えば山の麓等)にあると論じられることが多いが、真弓山城ではそれが共存しており、興味深い事例である。なお、出土した遺物は何れも15～16世紀のものが大部分で、築城は15世紀と考えられる。

(鈴木昭彦)

発掘ニュース

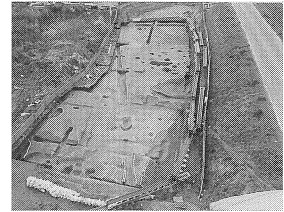
清洲城下町遺跡

清洲町



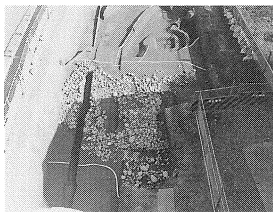
D区旧五条川流路

D区の旧五条川流路に沿った濃み部分から、永正五年銘の木簡とともに多くの陶磁器、木製品、人骨、獣骨などが出土した。また、五条川下流にあたるF区では城下町後期の屋敷地を区画する溝を3条検出した。当該地での土地利用解明の一助となろう。



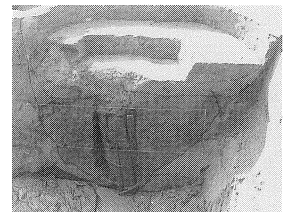
岩倉城遺跡

岩倉市



集石墓群

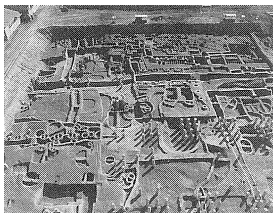
本遺跡の最終調査となる90A区を調査。上面では、中世・戦国期の溝や桶組みの枠を持つ井戸等を検出した。下面では、弥生中期（貝田町期）の溝2条、及び方墳周溝を再利用する形で6～7世紀に築かれた「集石墓群」を確認している。



戦国期の井戸

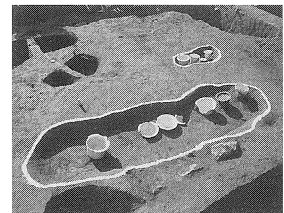
三の丸遺跡

名古屋市



調査区東半

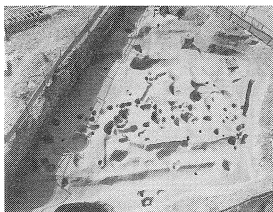
今回の調査では、4軒の武家屋敷地が検出されており、屋敷間の境界溝・廃棄土坑・地下室・井戸等が確認されている。遺物は、廃棄土坑を中心にコンテナに約250箱出土しており、18世紀を主体とした時期の陶磁器、土器類が大半を占めている。



SK89・100

清水遺跡

西尾市



A区全景

矢作川左岸の碧海台地縁辺部に位置する。戦国時代から江戸時代にかけての土坑・溝・貝層などを検出。出土遺物には瀬戸・美濃焼・伊万里焼などの陶磁器類の他に、土鍋、土釜、漁網錘、銅銭(寛永通宝)、キセル、鉄滓等がある。



遺物出土状況

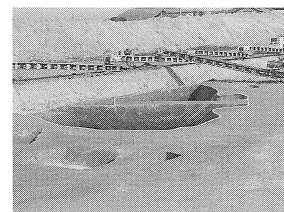
岡島遺跡

西尾市



B区全景

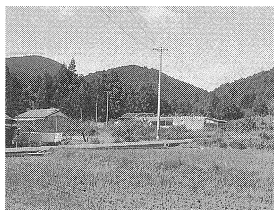
A・B区合わせて9000㎡を調査したが、東半分は自然流路であった。上面では、弥生時代後期の方形周溝墓4基・井戸1基と土坑・壺棺墓の他、流路埋積後の平安時代の堀立柱建物等を検出した。A区の下面では弥生時代中期の方形周溝墓等を確認した。



SE 01

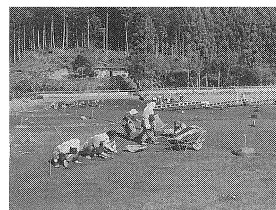
松久保遺跡

東栄町



遠景(南東より)

北設楽郡東栄町大字中設楽字松久保に所在し、標高約 300 m の河岸段丘南向き緩斜面に立地している。平成 2 年10月より翌年 3 月まで約 6 ヶ月間調査を実施し、縄文時代中期～晩期、弥生時代中期の土器片、石器等が出土した。



作業風景

センター日誌

埋蔵文化財研修会

平成 3 年 1 月 24・25 日

文化庁文化財調査官 服部英雄氏

「荘園の研究」

奈良国立文化財研究所 松沢亜生氏

「石器の観察と製作実験について」

大阪市立大学名誉教授 粉川昭平氏

「遺跡から発見される植物遺体と古環境」

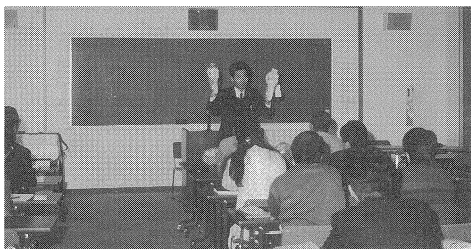
帝塚山大学考古学研究所長 堅田直氏

「コンピューターを利用した遺跡の調査」

国立歴史民俗博物館助教授 西本豊弘氏

「朝日遺跡の弥生ブタについて」

参加者 25 名



来訪者

12. 3 君津市文化財センター 箕島正広氏他3名

神奈川県埋文センター 坂口滋皓氏他1名

4 静岡県埋蔵文化財研究所 山下 晃氏

7 図書館研究会 40名

19 名古屋学院大学 榑崎彰一氏

25 中部大学教授 井関弘太郎氏

1.10 茨城県教育財団 小泉光正氏

17・18 奈良国立文化財研究所 松沢亜生氏

21 中日新聞文化部次長 阿部孝子氏

23 一宮市博物館 岩野見司氏他10名

31 県土木部 水野 貢氏他 2 名

調査報告会

平成 3 年 2 月 23 日

岩倉城遺跡

岩倉市

昭和62年度から平成 2 年度まで実施した約 10,000㎡ の発掘調査を通じて得られた、戦国時代の城跡を中心とした遺構・遺物について調査結果を報告した。

参加者 200 名

現地説明会予告

平成 3 年 3 月 23 日

三の丸遺跡

名古屋市

昨年10月より実施している名古屋城三の丸の発掘調査によって得られた、江戸時代武家屋敷跡などの調査結果の説明会を行なう。



1.31 県教委教職員課 7 名

2. 5 名古屋学院大学 榑崎彰一氏

6 県海部事務所 13 名

8 県新文化会館事務局 4 名

13 三重県埋文センター 浅生悦生氏他 1 名

埋蔵文化財愛知 No. 24

発行 平成 3 年 3 月

編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター

〒 498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田
字野方802番24

TEL 0567 - 67 - 4161 ~ 4163

印刷 株式会社 クイックス